

第一回

平成二十五年年度

宇都宮短期大学附属中学校

入学試験問題

国語

注意

- 1 「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は四〇分間です。
- 3 問題数は大きな問題が三問で、問題文は一ページから七ページまであります。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 5 「始め」の合図があったら、すぐに受験番号と氏名を解答用紙に記入してください。
- 6 試験中に質問があれば、手をあげて先生に聞いてください。
- 7 「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおいてください。

〔一〕

次の、言葉に関するそれぞれの問いに答えなさい。

問い1 次の——線部の漢字の読み方と同じものを、下のア～エから選び、記号で答えなさい。

- (1) 気配「ア 造花」 イ 家来 ウ 記録 エ 貴重
- (2) 定規「ア 情景」 イ 提出 ウ 精神 エ 音程
- (3) 期限「ア 対岸」 イ 童顔 ウ 元祖 エ 厳正

問い2 次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 中学生タイショウの本を読む。
- (2) 彼の意見をシジする。
- (3) 問題をヨウイに解決できた。
- (4) お風呂のお湯がアツい。
- (5) 敷地の面積をハカる。

問い3 次の慣用句の□に当てはまる言葉を後から選んで、漢字に直して書きなさい。

- (1) □が立たない。
 - (2) □を売る。
- 「ハ ミズ アブラ ハネ」

問い4 次の熟語の構成をア～エから選んで、記号で答えなさい。

- (1) 翌日 (2) 番組
- ア 音十音 イ 訓十訓 ウ 音十訓 エ 訓十音

問い5 次の——線部の主語を——線部ア～エから選び、記号で答えなさい。

- (1) 妹は朝食にパンとヨーグルトを食べた。
- (2) 私たちの教室は太陽の光が入り、たいへん明るい。

〔二〕

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

粹すいに生きていた江戸えどっ子たちですが、実は借金まで粹すいでした。

江戸時代も、お金を借りたときには、当然、借借書を書くのですが、これが欧米おみべいなら、期日はいつで、それまでに返せなかった場合は利子りしがこう、担保たんぽはこうと、膨大ぼたいな但し書きたなしがきが加えられます。(A)、江戸時代に交かわされた但し書きは違ちがうんです。江戸時代は、期日までに返せなかった場合の但し書きに、なんて書いたと思いますか？

「(1) □」。

この一言ひとことだけなんです。注3新渡戸にわたと稲造いなぞうが著あした『武士道』にもこのように書かれています。

「恩借おんしやくの金子きんす御返済へんさい相怠あいおたり候節そうろうせうは衆人しゆうじんの前まへにてお笑わらいなされ候くわしからまうらうとも不苦候ふくこう」

もし私が借金を返済しなかった場合は、衆人の前で笑われても苦しからず、というのがだいたいの意味ですが、そ

れが証文になってしまうのですから、武士ってすごいです。

① 町人だって負けてはいません。

江戸には、たくさんのお店が軒を並べていましたが、ほとんどの取引は、「盆暮勘定」と呼ばれ、支払いはお盆と年末の二回だけ。いちいち証文も書きません。お客は商人がつける帳面の内容を信頼し、商人も、お客さまがちゃんと支払ってくれることを信じているから、こういう取引が成り立っていたのです。

自分を信頼してお金を貸してくれたら、商品売ってくれた人を裏切るのは、「野暮」。(B)、自分のプライドにかけてお金はやんと返す。正しいか正しくないかじゃない。得か(2)かでもない。粹か野暮か。そこにプライドをかけているんです。そんな人生のものさしって、かつこいいと思いませんか？

江戸の粋な生き方の例を、(3)からも探ってみましょう。

人とすれ違うときに、お互いが右肩をスツと引く。これは肩と肩がぶつからずすむ「肩引き」と呼ばれる所作です。

雨の日ですれ違うときには、相手の足元に傘のしずくが落ちないように、傘を外側に傾けます。これは「傘かしげ」と呼ばれていました。

乗り合い舟が混んできたら、江戸っ子たちは握りこぶしひとつ分ぐらい腰を浮かせて、さりげなく席をつめていきます。これは「こぶし腰浮かせ」。広い場所をわがもの顔で独占するのは(4)ですが、これ見よがしに席を譲るのも(5)なんです。相手に心の負担を感じさせずに思いやるのが、(6)というものです。

十八世紀初頭には、江戸の人口は百万人を超えていたといわれています(同じ時代のロンドンで約八十六万人、パリが約五十五万人ほど)。(C)、江戸の町の大半は武家屋敷で占められていたので、町人は町全体の五分の一ほどの地域で、ひしめき合って暮らしていました。おそらく世界一の人口密度だったでしょう。

そういう環境のなかで、争いごとを起こさず、みんなが心地よく暮らすために、江戸っ子たちは互いの感性を磨いていたのです。そうして磨きあげた感性から自然に出てくる所作を、「江戸しぐさ」といいます。

「江戸しぐさ」の「しぐさ」とは、「思草」と書きます。「思」は、「思案」「思想」などの「思」。「草」は「言草」などの言葉に使われる「草」と同じで「行為」のこと。

(D)、「思草」とは「思いと行動は一つ」ということです。知識ではなく、(7)なんです。粋とは、他人を思いやる感性を持ち、それを瞬時に表現できること。江戸っ子たちはそんな粋な大人を目指していたのです。

江戸時代の日本は、二〇〇年以上戦争がなかったわけですが、これは、世界の歴史のなかでも特筆すべきこと。これだけの大都市でありながら、犯罪もきわめて少なく、殺人事件は幕末の騒乱期を除き、年に一件あるかないかだったそうです。人々の粋な生き方が穏やかで平和な社会をつくりだしていたんですね。

最後に、粋と野暮は何が一番違うのか。その根っこの部分を一言で言うならば、「共生」の思いがあるかないか。そこに尽きるのではないかと思います。

「私は生きている」ではなく、人と人とのつながりのなかで、「私は生かされている」という感性。共生、それは、おかげさまという感性です。(ひすいこうたろう・白駒妃登美「人生に悩んだら『日本史』に聞こう」から)

(注1) 担保Ⅱ返すことの保証のために、借りた人が貸した人にあらかじめ提供するもの。

(注2) 但し書きⅡ約束ことを書いた文章。

(注3) 新渡戸稲造Ⅱ(一八六二〜一九三三) 教育者、農政学者。

(注4) プライドほ誇り。

(注5) 行為ほおこない。

問い1 () A S Dに入れる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア [A] しかも B つまり C ところが D だから
- イ [A] ところが B つまり C だから D しかも
- ウ [A] ところが B だから C しかも D つまり
- エ [A] つまり B しかも C ところが D だから

問い2 「(1)」にあてはまるものとして、最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 衆人(たくさんの人)の前にて刑罰けいばつを受けませうしょう
- イ 衆人(身分の低い者たち)の前にて苦しみを受けませう
- ウ 縁えんをお切りなされ
- エ お笑いください

問い3 ①町人だつて負けてはいません。とありますが、「町人」は、(1)「だれ」に、(2)「何」で「負けてい」ない、
というのですか。(1)は二字で、(2)は五字で、それぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

問い4 (2)にあてはまる言葉を、漢字一字で答えなさい。

問い5 ②稗ひか野暮か。について次の問いに答えなさい。

- (1) 「稗」とはどのようなことをいいますか。解答らんの「〃こと」に続くように本文中から二十四字でぬき出して答えなさい。(、や。やその他の記号も字数に数える。)
- (2) 「稗」と「野暮」の違いは何だといひますか。その答えとなる部分を本文中から十四字でぬき出して答えなさい。(、や。やその他の記号も字数に数える。)

問い6 ③人生のものさしとありますが、本文中での「ものさし」と最も意味の近い言葉を次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 判断 イ 物語 ウ 慎つつしみ エ 基準 オ 人情

問い7 (3)にあてはまる言葉を本文中から探し、五字でぬき出して答えなさい。

問い8 (4)、(6)には、「稗」または「野暮」のいずれかが入ります。「稗」なら「ア」、「野暮」なら「イ」
を選んで、それぞれ記号で答えなさい。

問い9

(7)

にあてはまる漢字二字の言葉を、本文中からぬき出して答えなさい。

問い10

④

穏やかで平和な社会とありますが、どのような社会ですか。それが最も具体的に書かれている連続した二文を探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。(、や。やその他の記号も字数に数える。)

問い11

本文中における「江戸の粋な生き方」として合っているものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア もし借金を返済してもらえなくても不満は言わず、笑ってゆるすこと
- イ 商人とお客の間に信頼関係があるので、一年に二回の「盆暮勘定」ですますこと
- ウ 乗り合い舟が混んできたなら、ほんの少し腰を浮かせて目立たないように席をつめること
- エ “肩引き” “傘かしげ” “こぶし腰浮かせ” など、さりげない知識であつてもしっかりと理解していること
- オ お金の借用書に膨大な但し書きをあえてつけず、客を待たせないように短い言葉だけで速やかに作ること

(三)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生の「知季」はクラブチームで「レイジ」や「陵」、高校生の「要一」と飛込みの練習をしている。新しく就任した「麻木コーチ」は、「知季」にだけトレーニングのメニューを渡した。そのような中、「麻木コーチ」がクラブ存続のため、オリンピック選手を出そうとしていることが明らかになった。

「不可能だなんて思うなよ。」

マットワークの最中、いつの間にかウレタンマットの上で膝を抱えこんでいた知季に、背後から要一の声があった。

要一はいつもこんなふうに、背中だけで知季の思いを見ぬいてしまう。^①

「はじめのまえからあきらめるのはやめろ。可能性は誰にでもある。おれにも、おまえにも、な。」

ふりむくと、要一は冗談どころかいつになく真剣な目をしている。

「でも、そんな……むりだよ、来年なんて。」

「確かに、これがほかの競技だったらむりかもしれないな。でも、おれたちがやってるのは選手層の浅いマイナーな飛込みだ。だからこそ誰にでもチャンスがあるんだよ。」

知季の横に腰を下ろし、要一が早口でまくしたてる。要一は要一で興奮しているんだ、と知季はその凄みのある眼光に思った。

「いいか、オリンピックの飛込みに出場できるのは、男女あわせて三人がいいとこだ。そのうちの一人は兵庫の寺本健一郎に決定だろう。あいつは強い、海外の選手とも互角に戦える日本のエースだ。でも、残りの二人になろうとするやつらはみんながどっこいどっこいだ。誰がチャンスをつかんだっておかしくない。それに飛込みは博打性の高い競技だしな、選考会当日の調子次第でいくらでも雲行きが変わってくる。」^③

「でも、ぼくはそのどっこいどっこいの中にも入っていないんだし。」

「だったら入れ、急いで入れ、まだ間に合う。日本には飛込みをはじめで三年でオリンピックに出た選手もいるんだぞ。おまえは六年目だろう、代表になって何がおかしい？」^④

要一は強気に言い切り、「それに」とつけたした。

「それに、おまえにはあの女コーチもいる。」

それも気が重い理由のひとつだった。ついさっき、その女コーチが知季に偏った指導をしているとクレームがついた話を聞いたばかりじゃないか……。

要一が立ち去ると、知季はくると首をまわしてトレーニングルームを見まわした。中学の体育館よりもひとまわり小さな板張りのスペース。陵とレイジは片隅の陸上板で踏み切りの練習をしている。

六年前、知季とほぼ同時期に飛込みをはじめたレイジと、その半年後に入ってきた陵。あのころはまだたくさんの仲間がいて、みんなでわいわい楽しくて、でも、水に体を打ちつけるたびに一人減り、学校の成績が下がることに二人減り……: どんどんさびしくなっていく、結局、最後に残った同級生は三人きりだった。

三人いたから、これまで続けてこれたのに。張りあったり、励ましあったりしながらやってきたのに……。

そう思うと無性にさびしくて、やりきれない。迷ったあげく、知季は思いきって二人のもとへと歩みよっていった。

「あのさ。」

知季を前にしたレイジは (1) 下をむき、陵は (2) あごを突きあげた。

「前にも見せたよね、自主トレの練習メニュー。おれはただあれを麻木コーチにもらって、勝手にやられてるだけだから。べつに特別扱いとかされてるわけじゃなくて、それだけなんだよ。」

⑤「……それだけ、かよ。」

低くうなるような陵の声がした。

「トモにとってはそれだけでも、自主トレのメニューさえもらっていないおれたちにとっては、それだけじゃないんだよ。」

「……。」

「トモはいつもそうだ。去年の関東大会でも、おれやレイジのほうがトモより成績よかったんだ。でも富士谷コーチはいつもトモのほうを気にかけてたし、要一くんだってトモばかりをかわいがる。」

「そんな……。」

「でもおれはずっと待ってたんだよね。いつかばりばりの見る目のあるコーチがやってきて、トモよりおれを選んでくれる。みんなの気づかないおれの才能を引きだしてくれる。そんなのをずっと待ってたんだけどさ、やっと現れたばりばりのコーチは、やっぱりおれよりトモを選ぶんだよ……。」

目を赤くした陵の声が震えた。いばり屋の、プライドの高い陵がここまで自分をさらけだしてくれたのは初めてだった。

「トモ、もういいから。」

どうすればいいかわからず立ちつくす知季にレイジが言った。

「もういいから、トモは麻木コーチとオリンピックをめざしなよ。」

それは確かに応援の言葉だった。なのに実際は突き放していた。レイジの冷たい瞳が、ゆがんだ唇が、トモがここにいるとつらいからどっかへ行ってくれ、と訴えていた。

「わかった。でもおれ……。」

でもおれ、

(3)

なんて一言も言ったことないんだけど。

⑥ 誰かに聞いてほしかった言葉をのみこんで、知季は二人の前から離れた。そのままトレーニングルームからも離れ、家に帰って一人で泣いた。

(注) 博打性Ⅱうまくいくかいかないか、やってみないとわからない様子。

問1 ① 背中だけで知季の思いを見ぬいてしまう。とありますが、「要一」は「知季」のどのような思いを「見ぬいた」のですか。それを説明した次の文の [] ア・ウに入る言葉を、それぞれ本文中から書きぬきなさい。ただし、アは三字、イは六字、ウは三字とします。

オリンピック出場の [ア] があるにもかかわらず、 [イ] から [ウ] だとあきらめるような思い。

問2 ② 早口でまくしたてる。とありますが、この時の「要一」の気持ちとして適当でないものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「知季」が自分を頼りにしてくれることを願う気持ち
- イ 自分が「知季」に期待していることをわかってほしい気持ち
- ウ 自分の考えをどうしても「知季」に理解してもらおうという気持ち
- エ 弱気になっている「知季」を奮い立たせようとする気持ち

問3 ③ 雲行きが変わってくる。の本文中での意味は、どれですか。最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 状況が違ってくる
- イ 意欲がわいてくる
- ウ 問題が生じてくる
- エ 結果が見えてくる

問4 ④ 日本には飛込みをはじめて三年でオリンピックに出た選手もいるんだぞ。おまえは六年目だろう、代表になって何がおかしい？とありますが、「要一」はなぜこのように思うのですか。その理由を説明した次の文の空らんに入る言葉を、本文中から十一字で書きぬきなさい。

飛込みは [] 競技だから。

問5 [(1)] と [(2)] に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア [(1)] 悔しそうに [(2)] 誇らしげに
- イ [(1)] 申し訳なさそうに [(2)] 憎らしげに
- ウ [(1)] 恥ずかしそうに [(2)] 攻撃的に
- エ [(1)] 気まずそうに [(2)] 挑戦的に

問6 ⑤ ……それだけ、かよ。とありますが、この時の「陵」の気持ちとして最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア コーチに特別扱いされている上に無神経な発言をした「知季」に対する腹立たしさ
- イ オリンピック候補の座を「知季」に奪われてしまいそうなことに對する危機感
- ウ 本当はコーチに目をかけてもらいたいという「レイジ」の思いを理解しようとしていない「知季」に対する不信感
- エ 自主トレのメニューをもらえるほど飛込みの技術が上達していない自分に対する情けなさ

問7 [(3)] に入る言葉を、本文中の言葉を使って答えなさい。

問い8 ⑥ 家に帰って一人で泣いた。とありますが、その理由として適当なものには「○」を、適当でないものには

「×」をつけなさい。

ア プライドの高い「陵」が声を震わせて、本音をさらけ出してくれたことに感動したから

イ 「陵」と「レイジ」に自分の気持ちを理解してもらえず、冷たく突き放されたから

ウ 結果を残せないことで、「陵」や「レイジ」に対して負い目を感じたから

エ 特別扱いをされている自分が結局一人であることを感じたから